2nd POINT 古語(1) 現代と意味のちがう語

本冊 p.6・7

3

答 問一 (ア) 問二 (ウ) 問三 (エ)

検討 **問一** 「いたづら」は基本古語である。→6ページ「ココが出る！」参照

問二 あるべからぬこと→あってはいけないこと→よろしくないこと。

問三 「道徳」は人間としての生き方、「道理」はものごとの筋道をいう。

通釈 陰陽師の有宗入道が、鎌倉から（京へ）上って、（私を）探してやって来たが、まず（門を）入って（言うことには）、「この庭のむだに広いことは、驚きあきれたことで、よろしくないことだ。ものの道理を知る者は（何かを）植えることに努める。（人の通る）細い道を一つ残して（あとは）皆、畑におつくりなさい」と忠告した。本当に、少しの土地をもむだにしておくことは、無益なことだ。食物や薬の材料となる植物などを植えておくべきである。

4

答 問一 (エ) 問二 (ウ)

検討 **問一** 「味はひ深うさうらふよ」という所から誤解が生じたのである。「味」ということばは味覚だけをさすのではない。

問二 「徒然草」は、鎌倉時代に吉田兼好が書いた随想である。「ちと仮名をもよむ人」が、この本の感想を述べたわけである。

通釈 人が集まって語り合う中で、少し仮名文学をも読む人が、「このごろ『徒然草』をたびたび見て楽しんでいるが、（あれは）格別に味わい深いですよ」と言うと、その場に座っていた人が出しゃばって、「それほどに口あたりがよいと思われても、あまり多くは召し上がるな。つれづれ草のあえ物も、食べ過ぎてはからだに毒と聞きましたよ」と言った。

3rd POINT 古語(2) 古文特有の語

本冊 p.8・9

5

答 問一 (ウ) 問二 (エ) 問三 (ウ)

検討 **問一** 時の流れにそってはっきりしてくる音色に、作者は趣を感じるのである。

問二 「ほのかに」とは、形なら「ぼんやり」、色なら「ほんのり」、音なら「かすかに」。

問三 「徒歩より」は「徒歩で」と訳す。

通釈 笛といえば横笛がたいそう趣がある。遠くから聞こえるのが、しだいに近くなってゆくのも趣深い。（逆に）近かったものがはるか遠くになって、かすかに聞こえるのもとても趣がある。車で（行く時）も、徒歩で（の時）も、馬で（の時）も、[illegible]

6

答 問一 塵区 問二 a―(イ) b―(エ) c―(ア) d―(ウ)
問三 あらば――といと

検討 **問一** 「塵」はちりのこと。だが、ここで言っているのは目に見える汚れのことではない。

問二 「わきて」は「わけても」、「さとて」は「さりとて」という形で現代語に残っている。

問三 「かかる身（＝このような生き方）」とは、俗世間を捨てて旅を続けた芭蕉の生き方をさす。

通釈 名誉と私利に埋もれた街を駆け、深い欲望の海におぼれて、いつかは滅びる我が身を苦しめている。なかでも大みそかの夜のありさまなどは、言うまでもなくたいそういやなものだが、人の家の門をたたき回って、ぎょうぎょうしく騒ぎ立て、足どりもあわただしく大声をはりあげて通り過ぎる様子など、驚きあきれる行為である。

そうはいっても愚かな我が身は、どうやって俗世間をのがれよう。――年は暮れてしまった。笠をかぶりわらじをはいて（私が旅を続けて）いるあいだに。（芭蕉）

（部屋の）片隅に寄ってこの句を小声で吟じていると、心も澄みわたって、このような生き方のできる身であれば（いいのになあ）と非常に尊く思い、私にとっては悟りに到達する手本だともいう気がする。（注：摩訶止観は、天台宗で修行の道筋を説いた根本聖典）